

## ダイバーシティ研修報告

# 有島武郎の足跡を訪ねて

## —1900年代初頭のハーバード大学とその時代—

丁 貴 連

### 【派遣先】

HARVARD -YENCHING LIBRARY of the Harvard College Library (ハーバード大学イェンチン図書館：マックヴェイ山田久仁子研究室)

### 【期間】

1回目：令和元年8月10日～9月28日

2回目：令和2年2月20日～3月30日

### 【研究目的】

本研究は、有島武郎のアメリカ体験、とりわけニューイングランド時代とハーバード大学の体験を考察するための「基礎作り」をねらったものである。

### 【研修背景】

本調査に先立つこと4年前の2016年、私はサバティカルを利用してアメリカ留学時代（1903.8～1906.8）の有島武郎の足跡を調査（2016.4～2017.1：コロンビア大学東アジア言語文化学部客員研究員）したことがある。しかし残念ながら、この調査では「ペンシルベニア時代とハヴァフォード大学」、「ニューイングランド時代とハーバード大学」、そして「ワシントン時代と議会図書館」の3期に分けられる有島のアメリカ留学生活のうち第1期と第3期の足跡を辿るにとどまり、第2期の調査は費用と時間の問題で断念した。問題は、この第2期に、有島は思想的転換点を迎えていたのである。その転換点とは、ハーバードで出会った在米社会主義者の金子喜一（1875～1909）とその妻ジョセフィン・コンガー（1874～1931）、そ

して弁護士ピーボディー（1862～1938）たちとの交流を通して、社会主義や無政府主義、フェミニズム、ホイットマン、ロシア・北欧文学などに接近していったことである。社会主義をはじめとするこれらの思想が、その後の有島の文学と生き方に重要な意味を持つこととなったことは周知の事実である。

だからこそもっと時間をかけて徹底的に調査をせねばならないと思っていたわけである。しかしその通りにはいかず、気が付けば研究最終年度を迎え、ハーバードを優先しなかった自分を責めながら、最終報告書の執筆に取り掛かっていた。まさにその時、宇都宮大学女性教員海外派遣制度による2019年度海外派遣者に選ばれ、憾みを残したまま中断を余儀なくされていたハーバード大学時代を調査する道が開かれたのである。期待していた長期ではなく、夏休みと春休みを使わねばならないという短期滞在となり、フィールドワーク中心の計画に切り替えなければならなかったものの、諦めかけていた再調査の機会を与えてくれた宇都宮大学ダイバーシティ研究環境推進本部と国際学部に感謝しつつ、第1回目の調査を終えたところである。

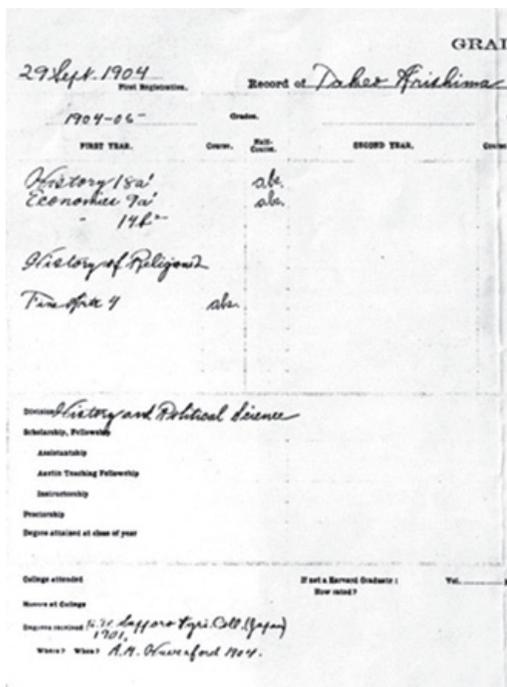
### 【研修方法及び概要】

調査に当たっては、有島が書き残した日記と手紙、作品（『迷路』『リビングストーン伝』第四版序言）、『ホイットマンの一面』などを手掛かりに、思想的転換を果たす場となったハーバード大学在学中の有島の足跡をできる限りに正確に追い、有島のアメリカ留学の意味

を考察するための、「基礎」を固めることができた。その成果は2回目の調査が終了次第に順次形にしていく予定であるが、本報告書ではその一端を紹介したい。

#### ○ハーバード大学で学ぶ

1904年6月10日、ハヴァフォード大学でM・Aの学位を取得した有島は、次の留学先としてハーバード大学を選んだ。家族宛に送った7月14日-15日の書簡には、「同校はご存じの如く米国二大々学の一にして規模の大と経歴の古きとは一年の遊学に価す」とその理由が述べられている。



【図1】有島武郎のハーバード大学学籍簿主要部(“THE HARVARD UNIVERSITY CATALOGUE 1904-5” Cambridge Published by the University 1904)

期待の通り、ハーバード大学に着いた有島は、「何トナク人ニ学問ヲ勸ムル様ナ」大学の雰囲気も、「人ノ往来甚稀」な下宿の周辺の雰囲気も喜んだ。



【図2】ハーバード在学期・前半の下宿先(12 Kirkland Place)有島は玄関先左手に住んでいた。(2019年8月15日筆者撮影)

【図1】の学籍簿によれば、有島は9月29日に入学手続きをし、歴史学18a-1・経済学9a-1・宗教史2・美術4の4科目を受講している。ただし、学位を取らずに「気儘に好めるcourseを取りて居申候」という姿勢をとっていた有島は、早々に授業をサボった。その代わりに、「経済学」の授業で知り合った金子喜一に誘われてボストン市内にある社会主義者の集会に出かけるなど、有島は授業よりも、むしろ大学の外に関心を向けていった。

#### ○文学・哲学への関心

ハーバード大学は、田舎のこぢんまりとしたクェーカ系の宗教学校であるハヴァフォード大学と違って、さすがに知的刺激に満ちていた。またケンブリッジ、ボストン、あるいはその周辺にも、いわば文化的な雰囲気が漂っていた。有島は、そこで様々な方面に関心を拡大していったのである。例えば、授業が始まって間もない10月16日(土)、有島は錦繡の秋を惜しんで日本人の友人とコンコード見物に出かけた。アメリカ独立戦争の最初の銃声が響いた古戦場であり、エマソン、ホーソン、ソローらの文人が住んだ旧跡である。

この日の小旅行は有島自筆のエマソンの館の絵と共に日記「観想録」の中に詳細に記されている。その日記を携えてコンコードに向かった

私は、有島が辿ったルートをできる限り正確に追ひ、歴史と学芸の町であるコンコードで有島の面影を彷彿させることができた。



【図3】 115年前の当時と全く変わらない佇まいのエマソン館。(2019年9月10日筆者撮影)

この旅行を契機に、有島は『自然論』をはじめとするエマソンの作品とジョン・モーレイの『エマソン』評論を読み始めた。また、ゲーテと並ぶドイツの文豪シラーの歿後百年記念の催しがあると知ると、有島は事前に戯曲『マリア・スチュアート』や詩集を図書館から借りて読むなど、哲学や文学への関心を深めていたのである。

#### 【研修以外の活動】

滞在期間中は、ハーバード大学ライシャワー日本研究所と韓国学センターが主催・共催した講演会やシンポジウム、ワークショップなどに出席し、アメリカにおける日本研究と韓国研究の最先端を知り、海外在住の研究者と交流することができた。